

<論文>

女ことばに起因する翻訳の問題

Translation Problems Caused by Women's Language

古川弘子

(東北学院大学・文学部英文学科講師)

Abstract

The novel *The Edible Woman* (Margaret Atwood) was published in 1969, when feminism was becoming an influential trend in North America. Although this story has a radical feminist voice, it was translated into Japanese by a male translator Ōura Akio in 1996, and his language choice for the protagonist is excessively feminine. The theme of the novel, Marian's rejection of gender roles in society, would be in accordance with a rejection of the socially expected ideal female speaking style. Nevertheless, Marian in the Japanese translation seems to be happy to use impeccable women's language given and promoted by male-dominant authorities. The contradiction can be an obstacle to conveying the author's message to the readers who read the novel in Japanese. The author's intention can thus be lost in the translation. This paper will examine the effect of Marian's language use in the Japanese translation from a reader-response theory and a relevance theory perspective.

1. はじめに

日本語は、話し手の女らしさや男らしさを明確に示す言語だ。この点において、最も顕著な文法上の特徴は文末詞である。例えば、英文 “I will run” からはその話し手がどれだけ女らしいか、または男らしいかを特定することはできない。しかし日本語では、「走るわ」「走るの」「走る」「走るよ」「走るぜ」と文末の一音節が変わるだけで、話し手の印象が女らしさや男らしさの細かいレベルまで左右される。それゆえ、ある小説の女性登場人物の台詞が英語から日本語に訳される時、その人物の女らしさのレベルは細かく示されることになる。

この女らしさを表す言葉、すなわち「女ことば」は、明治時代(1868-1912)に「教養ある東京人の言葉」を基準とした標準語を規定した時に、その亜流として構築された(中村, 2007: 35, 43-45)。明治政府は男女の役割を明確にする必要があったため、共学を禁じる法律が 1878 年には制定され、女子学生はどのようにふるまい、話すべきかを教えられた。女子学生教育とは、「文化的に標準化された礼儀正しさの規則 (the culturally standardized code of propriety)」(Lebra, 1984: 42)¹ を教えること、つまり工業化を推し進める国家の戦力となる夫を支える妻

— 有能で主人や父親に対して謙虚で従順、品行方正、貞節を守り、質素で節約に努める主婦 — を養成するためのものだった (Nolte and Hastings, 1991: 152, 158; Inoue, 1994: 324)。換言すれば、社会が理想とする女性の養成と女ことばの構築は深く関わっていたのだ。

日本語で書かれた文学作品では、女性登場人物の女性性が強調されがちである (特に Inoue, 2003, 2004; 中村, 2007 参照)。日本語に訳されたテキストでも同様の傾向が見られ、例えば、*Bridget Jones's Diary* (Fielding, 1997) の主人公ブリジットはしばしば汚い表現を使うのに、その日本語訳『ブリジット・ジョーンズの日記』(亀井, 1998; 以下 BJD と略す) では、現実の日本人女性と比較しても随分女らしい話し方をする (Furukawa, 2009a, 2009b)。カナダの著名な小説家、マーガレット・アトウッドの *The Edible Woman* (1969) は、原書と日本語訳の言葉づかいに大きな違いが見られるもう1つの好例だ。この小説は、社会における女性のアイデンティティの確立がテーマになっている。主人公のマリアンはカナダの大都市に住む大卒の女性で、シーモアリサーチという調査会社で働きながら自分のアイデンティティと社会での役割を見つけようとしている。小説のテーマは女の自立、つまりフェミニズム運動のテーマと同じだ。しかし、その日本語版『食べられる女』(大浦, 1996; 以下 EW と略す) 中のマリアンは、明治から昭和 40 年代までに見られた「お嬢さまことば」(小林, 2007: 277) を使っている。お嬢さまことばとは、家柄のいい教養夫人の言葉を継承したもので、例えば太宰治の『斜陽』(1947) の「お母さま」やその娘のかず子が使っているような言葉のことだ (ibid.: 274-279)。

現代のワーキングウーマンであるマリアンが「お嬢さまことば」を話すと、読者にマリアンという人物と言葉づかいが一致していないという印象を与えるし、小説が訴えるテーマが説得力を持たなくなってしまう。実際、アマゾンジャパンに投稿されたカスタマーレビューには「こんなに面白い内容なのに、訳が・・・(原文ママ)読んでいて、若い女性に似合わない言葉遣いがとても気になった」(Yhamee, 2005) というものがある。EW に見られる翻訳は、日本社会に浸透している「女はこう話すべき」という規範に縛られた翻訳だと言えるだろう。女ことばの規範としての役割を考えた時に、小説の内容と主人公の言葉づかいとの不調和は非常に示唆的だ。そこで本稿では、EW のマリアンの声がどのように訳されているかを文末詞使用に焦点を絞って分析し、受容理論と関連性理論の観点から考察していきたい。

2. 食べられる女

The Edible Woman が世に出たのは、北米でフェミニズム運動が盛んになり、フェミニズムが影響力を持ち始めた頃だった。特に 1969 年はフェミニズム運動第二波の黎明期で、職場での男女平等や中絶の合法化が議題となっていた。カナダのオタワに 1939 年に生まれた著者のマーガレット・アトウッドは、処女作である *The Edible Woman* の出版前は詩人として知られており、1964 年には *The Circle Game* でカナダ総督賞を受賞している。権威あるブッカー賞を 2000 年に *The Blind Assassin* で受賞、それ以外にもこれまでに 5 度、同賞の最終選考に選ばれている。アトウッドは詩と小説以外にも児童文学、ノンフィクション作品、絵を出版するほか、批評家としても活躍している。

アトウッドは 1975 年のインタビューで、*The Edible Woman* がフェミニズム小説と形容される

のを拒み、こう語っている—「私はこれをフェミニズム小説とは思っていない。これは単なるソーシャル・リアリズムであり、その時の状況を描いただけだ(I don't consider it feminism; I just consider it social realism, and that's what things were like)」(Keith, 1989: 69)。しかし、この物語で議論されていることはまさにフェミニズム運動で取り上げられた問題だ(*ibid.*: 22; Stein, 1999: 6)。実際、アトウッドは 1979 年に *The Edible Woman* ヴィラゴ版へ寄せた前書きの中で出版当時(1971)を振り返りながら、この小説はフェミニスト小説を意図して書かれたと明記している。

いまではすべてのことが変わったと考えるのは誤りだろう。事実、この小説の基調は、社会が時代の外見よりもはるかに急速に変化しようと信じられていた例えば 1971 年ごろよりも、現在のほうがむしろ同時代的のように思われる。フェミニズム運動のゴールはまだ達成されていないし、自分たちはポストフェミニズムの時代に生きていると主張している人たちは、悲しい誤りをおかしているか、問題全体について考えるのがいやになってしまったかだろう(大浦暁生訳, 1996: 2)。

アトウッド自身はこの小説を「原(プロト)フェミニズムの書」(*ibid.*)と呼んだ。執筆当時の 1965 年は、フェミニズムはまだ力を持ってはおらず、例えば小説の舞台となっているカナダでは、教育のある若い女性には「あてのないキャリアウーマンの道か、そこからの出口としての結婚か」(*ibid.*)の 2 つの選択肢しかなかった。

1950 年代から 1960 年代の北米社会では、女は家庭を守るものという考え方はまだ主流だった (Howells, 1996: 42)。そのためこの小説のテーマは、社会における女の典型的な役割に主人公のマリアンが抵抗を示すことだ。マリアンのボーイフレンド、ピーターは保守的な考え方の持ち主で、女は結婚したら家庭に入るものと思い込んでいいる。ピーターが料理を満足にできないマリアンに対して批判的に言った台詞 “Why can't you ever cook anything?” (Atwood, 2007 [1969]: 63) が、その考え方を示唆している。ピーターは若くハンサムな将来を嘱望された弁護士で、マリアンには専業主婦になって欲しいと願っている。ピーターという名前は聖書で「岩 (the rock)」を意味し、この名前は比喩的にある安定を示している。つまり、ピーターが志向する、中流階級の立派で安定した暮らしを示唆していると考えられる (Cooke, 2004: 44)。マリアンは、ピーターが思い描く理想の女性像に自分を合わせることができず、彼女自身が「女という物体として同化させられ、食べ物にされる (assimilated and exploited as a female object)」(Lecker, 1981: 179) ような気がしてくる。ピーターの理想像と葛藤するマリアンは、プロポーズを機に精神的に不安定となり、摂食障害を引き起こす。実際、物語の中でピーターとマリアンの同居人のエイズリーは、マリアンに女性性を拒絶していることが問題だと言っている—“The trouble with you is [...] you're just rejecting your femininity” (Atwood 2007 [1969]: 80, italics in original)、 “You're rejecting your

femininity!” (ibid.: 272)。マリアンは単に女性性を拒絶しているだけではなく、ピーターや社会が持っている「男性が決めた女性性 (male-influenced idea of femininity)’」 (Keith, 1989: 39) を拒絶しているのだ。マリアンは自分の存在やアイデンティティを疑い始め、文学を学んでいるニヒリストの大学院生ダンカンに魅かれるようになる。これはマリアンが自分のアイデンティティを取り戻す過程を描いた物語なのだ。

このように、物語の中でマリアンはフェミニストとして描かれているにも関わらず、男性翻訳者によって訳され、その言葉づかいは非常に女らしい。カナダ社会における男女の役割分担に抵抗を示すマリアンは「社会が女に期待する理想の話し方」をしないだろうと予想されるのに、EW では古い女に対するイメージを壊そうとしている現代的なマリアンが、完璧な女ことばを使っている。日本語でこの小説を読むと、その言葉づかいからマリアンは社会に押し付けられている女の型に従順であるかのように見える。

3. 他の現代小説との比較

『食べられる女』(EW)のマリアンの言葉づかいの特徴は、大家さんや目上の同僚、仕事関係の人と話すときには丁寧でかしまった言葉づかいをし、友人や同年代の同僚、婚約者のピーターと話すときにはくだけた表現をすることだ。かしまった場面でもくだけた場面でも彼女の言葉づかいは一貫して女らしく、その話し方から受ける印象は丁寧で形式的、当たりが柔らかく、非断定的といったものだ。これらの特徴は、社会的に力のないものとしての女の立場に敏感、女らしいといったイメージを作り上げる。

マリアンの女性性がどの程度、強調されているかを調べるために、ここでは EW を上に挙げた『ブリジット・ジョーンズの日記』(BJD)と日本語で書かれた小説『キッチン』(吉本, 1988)と比較する。BJD も『キッチン』も現代小説で、登場人物の会話は主にくだけた場面でなされる。BJD のタイトルにもなっている主人公のブリジットはロンドンに住む 30 代の働く女性で、『キッチン』の主人公みかげは東京に住む 20 代の女子大生だ。

この分析では、それぞれの主人公が友人と話す場面の会話文を対象とする。EW ではマリアンがルームシェアをしているエイズフリーとの会話文(143 文)、BJD ではトム、ジュードとシャロンとの会話文(115 文)、『キッチン』では雄一との会話文(200 文)を取り出し、その文末詞をオカモトとサトウの分類表(Okamoto and Sato, 1992: 480-482)に従って 5 段階— strongly feminine, moderately feminine, neutral, strongly masculine, moderately masculine —に分類した。

アマゾンジャパンに投稿した読者が感じた違和感(Yhamee, 2005)、「こんなに面白い内容なのに、訳が・・・(原文ママ)読んでいて、若い女性に似合わない言葉遣いがとても気になった」という登場人物と不釣り合いな言葉づかいが、図表 1 に示した定量分析によって明らかになった。ここから、EW のマリアンは BJD のブリジットと『キッチン』のみかげよりも女らしい言葉づかいをしていることがわかる。例えば、マリアンとブリジットの feminine forms の使用頻度には 10.5%もの差がある。この差の大きさは、ブリジットとみかげの feminine forms の使用頻度が 1.30%しか変わらないことを考えると非常に示唆的である。

図表 1 をより詳細に分析すると、strongly feminine forms の使用頻度には 3 つのテキストにそれほど大きな違いがないことが分かる (EW が 26.57%、BJD が 28.70%、『キッチン』が 25.00%)。しかし、moderately feminine forms と neutral forms の使用頻度には明らかな差が見られる (moderately feminine forms は EW が 29.37%、BJD が 16.52%、『キッチン』が 21.50%、neutral forms は EW が 42.66%、BJD が 53.91%、『キッチン』が 52.50%)。全体として、EW は neutral forms の使用頻度が 10% 少なく、その分だけ feminine forms が多く使われていると言えるだろう。

図表 1 EW、BJD とキッチンの文末詞使用比較

文末詞	EW (1997)	BJD (1998)	キッチン (1988)
Feminine forms	55.94%	45.22%	46.50%
-Strongly feminine forms	26.57%	28.70%	25.00%
-Moderately feminine forms	29.37%	16.52%	21.50%
Masculine forms	1.40%	0.87%	1.00%
-Strongly masculine forms	0.00%	0.87%	0.50%
-Moderately masculine forms	1.40%	0.00%	0.50%
Neutral forms	42.66%	53.91%	52.50%

(1) 対象文は EW が 143、BJD が 115、キッチンが 200。

(2) 表記年は出版された年を指す。

(3) すべて小数点第 3 位で四捨五入した。

EW の原作は 1969 年に書かれたが、日本語版が出たのは 1996 年だ。BJD の出版年がその 2 年後の 1998 年だと考えると、2 つのテキストの言葉づかいはそう違わないと推測されるだろう。それに加えて、ブリジットが理想の男性を見つけるためにダイエットをするのに対して、マリアンは男が女に期待する理想像を拒絶し、その内面の葛藤は拒食症という形で現れる。もしマリアンが社会に押し付けられるジェンダー・イデオロギーを拒否するなら、マリアンは「社会が考える理想的な女性らしい言葉づかい」はしないだろう。それにもかかわらず、EW の中でマリアンは頑固にも女ことばを使い続ける。その言葉づかいのために、マリアンの葛藤が説得力を持たなくなってしまう。それゆえ上図で示した feminine forms の 10% の違いは注目されていいだろう。

EW を Jane Austen の古典作品 *Emma* (1816) の日本語訳の 1 つ『エマ』(ハーディング, 1997) と比較すると、驚くべきことに、マリアンの言葉づか이가 BJD よりも『エマ』に近いことが分かる(図表 2 参照)。feminine forms の使用頻度を見てみると、EW と『エマ』の差は 5% 以

下であるのに対して、EW と BJD には約 10.5%もの差がある。古典作品は概して現代小説よりも女らしい言葉づかいをすることが多いが、EW は現代小説であるにも関わらず、その主人公のマリアンは文末詞の分析に関する限り、古典作品に近い言葉づかいをしているということが分かる。

図表 2 EW、BJD とエマの文末詞使用比較

文末詞	EWJ (1998)	エマ (1997)	BJD (1997)
Feminine forms	55.94%	60.68%	45.22%
-Strongly feminine forms	26.57%	46.07%	28.70%
-Moderately feminine forms	29.37%	14.61%	16.52%
Masculine forms	1.40%	0.00%	0.87%
-Strongly masculine forms	0.00%	0.00%	0.87%
-Moderately masculine forms	1.40%	0.00%	0.00%
Neutral forms	42.66%	39.33%	53.91%

(1) 対象文は EW が 143、BJD が 115、エマが 178。

(2) 表記年は出版された年を指す。

(3) すべて小数点第 3 位で四捨五入した。

4. お嬢さまことばを使うフェミニスト女性

マリアンの言葉づかいの特徴を分析すると、最も顕著なのは「丁寧語＋女性文末詞(の、のよ、わね、わ、など)」の組合せだ。これは、上で説明したお嬢さまことばである。以下、その言葉づかいを説明していく。下の例は、市場調査中にマリアンが調査対象者に言った台詞だ。

(1) ST: You're only supposed to listen once, [.....] (Margaret Atwood, 2007 [1969]: 52)

TT: 一度聞くだけでよろしいのよ (大浦暁生, 1996: 66)

下線部「よろしいのよ」は「よい」の丁寧語「よろしい」に女性文末詞「のよ」を付加したもので、丁寧語と女性文末詞を同時に使うことで、マリアンの女性性の強さを表している。丁寧さと女性らしさは女ことばの主要な要素であり(Okamoto, 1995: 307; Inoue, 2006: 2)、マリアンが女ことばによって丁寧で女らしいイメージを作り上げていることが分かる。同じような例は他にもある。

- (2) ST: Where are we going to sit then? (Margaret Atwood, 2007 [1969]: 51)
 TT: ではわたしたち、どこにすわりますの? (大浦暁生, 1996: 65)
- (3) ST: I don't think there is room in the kitchen (Margaret Atwood, 2007 [1969]: 51)
 TT: キッチンには場所がないようですわね (大浦暁生, 1996: 65)
- (4) ST: You're doing fine, [.....] (Margaret Atwood, 2007 [1969]: 53)
 TT: 充分たすかってますわ (大浦暁生, 1996: 68)

実際、マリアンの話し方はヴァージニア・ウルフ著 *Mrs Dalloway* (1925) のダロウェイ夫人の話し方に酷似している。ダロウェイ夫人はロンドンの高級住宅街ウエストミンスターに住む国会議員の妻で、社交的でパーティを催すのが好きな女性だ。ここに挙げた 3 種類の日本語訳『ダロウェイ夫人』は翻訳された年代は違うが、偶然にも上で説明したお嬢さまことばを例外なく使っている。

- (5) ST: I had meant to have dancing, [.....] (Virginia Woolf, 1996 [1925]: 180)
 TT1: ダンスをいたすつもりだったんですよ (富田彬, 2003 [1955]: 284)
 TT2: ダンスをするつもりでしたのよ (近藤いね子, 1999 [1976]: 227)
 TT3: みなさんにダンスをしていただくつもりでしたのよ (丹治愛, 1998: 243)
- (6) ST: [.....] what a nuisance [.....] (Virginia Woolf, 1996 [1925]: 4)
 TT1: 大変ですわね (富田彬, 2003 [1955]: 10)
 TT2: 困りましたわね (近藤いね子, 1999 [1976]: 7)
 TT3: でも困ったことですわね (丹治愛, 1998: 14)

『ダロウェイ夫人』に見られる言葉は典型的なお嬢さまことばで、ダロウェイ夫人の上品で洗練された、丁寧でかしまった女らしいイメージを作り上げている。それゆえ、1970 年代のカナダのワーキングウーマンであるマリアンが、日本で 100 年以上も前に上流階級の女性によって使われていた言葉で話すのは違和感がある。現代小説である *The Edible Woman* を日本語で読む読者は、マリアンを現代女性とは見ないかもしれない。この原書に描かれたマリアン像と、日本語のお嬢さまことばが作り上げるマリアンのイメージは読者を混乱させ、ここで取り上げられている女の自立というテーマが説得力を持たなくなってしまうだろう。したがって、著者アトウッドのフェミニストとしてのメッセージが、この女性性を強調する翻訳によって弱まってしまっていると言える。

図表 1 で示したように、EW は BJD や『キッチン』と比較すると女性性が過度に強調されていることが分かった。翻訳家の性別を見てみると、BJD が女性翻訳家によって翻訳され、『キ

ツチン』の著者が女性であるのに対して、EW は男性翻訳家による翻訳だ。翻訳家の性別が、女性登場人物の会話文の訳に影響を与えた可能性が考えられる(この点については Furukawa, 2010 で分析している)。

加えて、原書ではマリアンも他の女性登場人物も、時々乱暴な表現をするが、日本語訳ではそのほとんどが削除されている。日本語訳の女性登場人物は乱暴な表現を避けるだけでなく、女性終助詞や他の文法用法を用いて女らしい上品な言葉づかいをしている。この結果、原書と日本語訳のマリアンのイメージを比較した時に非常に際立った違いとなって表れている。

5. 受容理論の観点から

ここで、*The Edible Woman* の原書と日本語訳がどう読まれたかを、イーザーの受容理論 (Iser, 1974, 1978, 2006) の観点から考えてみたい。イーザーによれば、文学作品には芸術の極と美学の極という 2 つの極がある。芸術の極というのは作者が作り上げたテキストであり、美学の極とは読者がテキストをどのように読むかにかかっている。受容理論とはすなわち、文学批評の焦点を芸術の極から美学の極へ—「テキストが何を意味するか」から「テキストが読者に何をしたのか」へ—と移したものであり、「読者がそのテキストを経験する過程に何が起こったか」の分析に注目する (Iser, 2006: 60-63)。それゆえ、文学テキストが読者にどう受容され、どのような影響を与えたかを考察することが主題となる。

受容理論はまた、テキストと文脈の交差点にも関心を寄せる。文学テキストに表象として現れる世界は既に著者の視点によって変容されており、現実世界の写しではない。文学テキストは現実世界の社会的、文化的、文学的システムの諸相を表しはするが、現実世界は変えられ、再整理されていて、現実世界のシステムとは何の関係もないかもしれない。虚構テキストはつまり、程度の差はあれ、現実世界と現実を作り変えたものとの組み合わせだ。だからこそ、世界は読者が慣れ親しんだものではなくっており、読者によって現実化されなければならない (Iser, 1978: 35; 2006: 60)。さらに、完全に語りつくされる物語というものはなく、物語にはたいして読者が埋めなければならない空白やギャップがあるものだ。例えば、読者がある小説を読み始めた時、その読者は小説の舞台を想像するだろうし、新しい人物が登場すれば、読みながらその人物を肉付けし具体化するだろう (Iser, 2006: 64)。さらに、小説に新しい文脈を持ちこむことによって、特定の環境に社会的、歴史的規範が加えられる。EW は規範の役割の移行を示したい例だ。この小説では、男性主導の社会によって決められた女性の役割の社会規範が主題として挙げられ、社会の優先順位に「力強く、劇的に、そして過激なまでに」 (Keith, 1989: 14) 挑戦している。イーザーが下に示すように、この小説は読者が妥当だとされている社会規範に疑問を持つように促している。

もし文学作品が読者の社会的、文化的背景から現れるのであれば、世の中に広まっている規範を架空の文脈から切り離し、そういった社会規制がどのように機能し、それらの規制が人々にどのような影響を与えるのかを読者に気づかせることもできるだろう。読者は

すなわち、彼らを導いている力、今まで疑問を持つことなく受け入れてきた力を新たな視点から眺めることのできる位置に置かれるのだ (Iser, 2006: 63)²。

受容理論 (読者反応理論) によると、文学作品は完成されたテキストではない。完成形が出来上がるのは作品と読者との相互作用によってである。つまり読書というのは、イザーが「具体化 ([k]onkretisation)」 (Iser, 1974: 274) すると表現しているように、読者が語彙、表象、リズムといったテキストの諸要素から能動的に文脈を構築していく過程なのだ。換言すれば、読者の受容が文学作品の意味を構築することになる。この過程において、テキストに使われる言葉や文の構造が大きな意味を持つ (Díaz-Diocaretz, 1985: 13-14)。

読者の一人ひとりが読書という行為に参加し、その一人ひとりが文学作品の意味を構築する。ということは、その読者が持つ社会的、文化的な背景によって、文学作品の意味は変わってくる。読者によって知識や経験のレベルが異なれば、文学作品の意味は異なって構築される。すなわち、同一のテキストでも、違う時代にいる違う人々には別の意味を持って解釈されるのだ (Iser, 2006: 63, 68)。

The Edible Woman は 1969 年に書かれ、1996 年に日本語に訳された。この 30 年の差は読者受容の差として現れるに違いない。加えて、英語圏の読者と日本語で読む読者での受容の仕方にも違いがあるだろう。例えば、1990 年代の終わりと 2000 年代初頭に書かれた英・米のアマゾンのカスタマーレビューから、英語圏の読者の多くは *The Edible Woman* を、1960 年代のカナダの社会的・歴史的なスナップショットとして、つまり、結婚に対する考え方が保守的で女が社会から抑圧されていた時代を描いた小説として読んでいることが分かる。実際、レビューを書いた一人はこの小説の印象を「懐かしい (nostalgic)」と形容している (Animalnation, 2007)。

英語圏での受容とは対照的に、アマゾンジャパンのカスタマーレビューから判断する限り、日本語版の読者は現代のワーキングウーマンの物語としてこの小説を読んでいる。この受容の違いは特筆すべきだ。なぜならこの差は、日本社会は西洋社会が 1960 年代に経験したフェミニズム運動をいまだ経験していないということを示唆しているからだ。加えて、日本の読者は、英語圏の読者よりも 1960 年代の女性に近いものを感じている。これは、現代の日本社会と 1960 年代のカナダ社会の差が、現代のカナダ社会と 1960 年代のカナダ社会の差よりも小さいということを意味する。アマゾンジャパンにレビューを書いたうちの一人は小説『ブリジット・ジョーンズの日記』などと同じカテゴリーに入る作品だと考えている (Erica, 2002)。このカテゴリーは英語で “Chick lit (literature)” (Mazza and DeShell, 1995) と呼ばれる、シングル女性の恋愛、セックス、仕事、結婚などを取り扱った作品群のことで、肩のこらない軽い読み物として捉えられている。このレビューが示唆するように、アウトワードのフェミニストとしてのメッセージが込められたこの小説が、日本語で読んだ読者によって別の文脈で受容されたことが分かる。これは、上に述べたように日本社会が欧米社会のように本格的なフェミニズム運動を経験していないことに原因があると考えられるだろう。英語圏と日本語の読者の経験の違いが、アマゾンのレビューに現れていると言える。

受容理論を翻訳という行為にあてはめて考えると、最初の読者、つまり小説の意味を構築する役割を担うのは翻訳者だ。テキストの中に込められたメッセージは、描写や文体によって暗示されるため、翻訳者はその暗示された意味を「何が書かれているか」だけではなく「どう書かれているか」から推測して構築しなければならない(Boase-Beier, 2006: 39-40)。英語から日本語に訳されたテキストを受容理論の観点から考えると、読者が女性登場人物のイメージを構築する(イーターの言葉で具体化する)のに不可欠な要素が、女性文末詞などで示されてしまう女らしさのレベルである。英語に比べて日本語では話し手の女らしさを細かく作り上げてしまうために、その登場人物が「何を言ったか」に加えて「どう言ったか」が非常に重要な意味を持つ。

The Edible Woman の日本語への翻訳の例で考えると、読者が受ける情報は登場人物の台詞の内容のみではなく、その内容をどのように伝えるかも含まれる。つまり、日本語に訳された女性登場人物の台詞には、その内容によって描かれた女らしさと、その人物の話し方によって作られる女らしさの二重の要素が含まれるということだ。この 2 種類の女らしさの要素が、日本語で読む読者が受ける登場人物のイメージを構築する。たとえその人物が必ずしも女らしい性格として描かれていなくても、翻訳者が女性性を強調した言葉づかいを充ててしまえば、その人物のイメージは非常に女らしいものになってしまう。一方で、その人物についての描写が性格の女らしさを示すものであれば、女性性を強調した言葉づかいで彼女の性格を際立たせることもできる。つまり、それぞれの登場人物の女性性は、その話す内容だけではなく、その話し方によっていかようにも表現できるということだ。それゆえ、翻訳者がその人物にどのような言葉づかいをさせるかが、非常に重要な意味を持つことになる。言ってみれば、翻訳者の心的な描写が原書の解釈に入り込み、その結果、読者の具体化の過程に介入することになるのだ(De Beaugrande, 1978: 26)。マリアンの女性性が強調された話し方は、著者がフェミニストとしてこの小説に込めたメッセージを読者に伝える過程に介入し、さらに日本社会のフェミニズム運動の経験不足が、日本での受容に影響を与えたと考えられるだろう。

6. 関連性理論の観点から

上で示した原書と日本語訳におけるマリアンのイメージの乖離を議論するために、関連性理論(Sperber and Wilson, 1986, 1995)の観点から考察することも有益であろう。関連性理論も読者の役割を重視するもので、読者の文学作品の解釈の過程において受容理論と似たような立場を取る。スペルベルとウィルソンの関連性理論は、発話の解釈における聞き手の役割を強調するもので、聞き手が話し手の意図をどのように解釈するか、話し手が意図する関連性を聞き手がどのように確認するのかを説明しようとしたものだ(ibid.: 9-17)。彼らによると、文章の意味的表象は話し手の考えを伝えるのには十分ではなく、聞き手はその発話がなされた文脈上の手がかりをもとに話し手の意図を推測しなければならない。それゆえ、意味伝達が成功するのは、「聞き手が発話の言語の意味を理解したときではなく、話し手の『意味するもの』を言語の意味から推測したときである(not when hearers recognise the linguistic meaning of the utterance, but when they infer the speaker's "meaning" from it)」(ibid.: 23)。聞き手や読者は、

話し手や著者の意図を推測することによって、意味上の表象と、実際に意図された意味とのギャップを埋める作業をしなければならない(MacKenzie, 2002: 16)。

スペルベルとウィルソンは文脈想定を分類し、発話において表現された意味と含意された意味との違いを明確にした。彼らによると(Sperber and Wilson, 1995: 17-21, 108-117, 142-151)、文脈想定とは話し手と聞き手の間で共有されている背景的な知識だ。聞き手が表現された情報を受け取る時、その意味を、背景知識(文脈想定)を使って解釈しようとする。この表現された情報と文脈想定が、聞き手に「文脈効果」(ibid.: 108)を生み出す。発話が間接的であればあるほど、文脈想定が必要となる。

表現された意味は表意(explicature)、意図的だと想定される含意された意味は推意(implicature)と呼ばれる。表意とは「明示的に伝達される想定(an explicitly communicated assumption)」(ibid.)で、推意は「暗示的に伝達される(implicitly communicated)」(ibid.: 182)。読者や聞き手は著者や話し手が言っていること(表意)と暗示していること(含意)を想定し、それらの根拠に基づいて意味を再構築しなければならない(Pilkington, 2000: 71; Sperber and Wilson, 1995: 182-183)。例えば、誰かが時計を見ながら「12時15分過ぎ」と言った場合、この発話は言語的には「12時15分過ぎ」を意味する。この言語的に表現された意味の解釈には何の疑いをはさむ余地もないだろう。しかし、その話し手が長ったらしい講義に退屈して12時半の講義終了を待ちわびているという可能性も考えられるし、12時に終わるはずの講義がまだ続いていることにイライラしている可能性もあるだろう。この発話はそれゆえあいまいであり、言語的に表された意味だけではなく暗示された意味を解釈することが重要なのだ。

スペルベルとウィルソンは、発話による伝達と書かれたテキストは類似しているとみなした。つまり、聞き手の解釈の過程は読者のそれに近いということだ。しかし、特に文学テキストのようなテキストを考えた時、これらの2つの過程には明らかな違いがある(Pilkington, 2000: 82)。テキストを読む時、通常の会話で見られるような実際の文脈、ジェスチャー、表情、声のトーンなどいくつかの要素が失われていることがほとんどだ。これら実生活の発話で見られる特徴は、聞き手が暗示された意味をつかむのに役立つ(MacKenzie, 2002: 30)。加えて、発話は聞き手に対して直接なされるものだが、文学テキストは知らない誰か、文学批評用語で言う「内包された読者」(implied reader)に向かって書かれる(Pilkington, 2000: 82)。発話がなされる場面では、文脈想定は伝達される側と共有されているか、理解されるものだ。一方、文学テキストの読者は、内包された読者に共有されていると仮定されている文脈想定を持たないかもしれない。そのため、テキストが何を意味するのかを推測しなければならない(Pilkington, 2000: 63)。それに加えて、いくつかのタイプの文学、例えば不朽の名作などと言われるようなものは、読者とは時間も空間も隔たっているものが多い。そのような場合、読者が含意を解釈したとしても、読者が実際に意図したものとはかけ離れたものとなる可能性があるし(MacKenzie, 2000: 30)、「伝達の必須条件としての相互知識が全く意味をなさなくなる(mutual knowledge as a pre-requisite for communication makes no sense at all)」(Pilkington, 2000: 62)。

情報の受け手が意味的に表されたものを単純にコード解読するだけでは含意を再構築する

ことはできない。情報の受け手は、話し手や著者の意図を可能な限り関連する想定のもとに推察しなければならないのだ (MacKenzie, 2002: 23)。先の例文「12 時 15 分過ぎ」に戻ると、私たちは発話者が実際に意図した意味をつかむことはできないが、その声のトーンや抑揚から推察することができるかもしれない。この文の表意は変わらないが、含意は文脈によって変化するので (Gutt, 2000: 46)。

もし含意が受け手にも共有されている場合、意図された意味を理解しやすくなる。しかし、含意が前もって知らされていたり、互いに分かっていたりするものでないと、正しい解釈をするためには労力を要する。ということは、含意が弱ければ弱いほど、情報の受け手はより努力しなければならない (Pilkington, 2000: 61-62)。例えば、下の会話がなされたとする。

A: Would you like to see *Macbeth* Friday evening?

B: Shakespeare's plays are not my scene.

この発話 A ではマクベスがシェイクスピアの作でどんな劇かはよく知られているため、A と B の話者同士で文脈はすでに与えられているか共有されており、含意は強いということになる。だから発話 B の解釈はそれほど難しくない。しかし、次の会話はどうか。

C: Would you like to go to the concert?

D: I'm not going as it's not my style of music.

発話 D の解釈は発話 B の解釈よりも難しい。それは、発話者 C がどのコンサートのことを言っているのか、どんな音楽のコンサートのことなのか、発話者 C はどんなタイプの音楽が好みなのかを推測しなければならないからだ。発話 D から聞き手が受け取る情報は、先の例よりも少ないため、発話の意味を再構築するためには発話 B よりも多くの労力を要する。

「12 時 15 分過ぎ」という先ほどの文が英語 “it's a quarter past twelve” であるとし、これを日本語に訳す場合を考えてみると、また別の要素が加わることになる。日本語には話し手の性を際立たせる役割を持つ文末詞があり、それを使うことによって女らしさや男らしさのレベルを付加する。もしこの文が文学テキストで女性登場人物の台詞として用いられ、書きことばで性を表す文法的特徴がない英語のような外国語から日本語に「12 時 15 分過ぎよ」や「12 時 15 分過ぎだわ」などと訳された場合、原書では性に関してニュートラルな一文が、途端に女性性を非常に際立たせたものとなってしまふ。この結果として、原書と日本語訳とで女性登場人物の像が大きく違えば、読者に誤った印象を与えることになるだろう。もし聞き手が話し手の発話意図を誤って理解したとしても、聞き手は話し手の声のトーン、表情やしぐさから修正することは可能だろう。または、聞き手はその印象は含意として意図されたものだと思像するかもしれない。しかし、読者が日本語訳を読む場合を考えると、ほとんどの読者は確認のために原書を読むわけではないので、まず登場人物の印象が違って構築されていることに気がつかないだろう。さらに、読者はその印象が正しいかそうでないかを確認する手がかりがないために、その不

致を修正したり、含意として意図されたものだと気がついたりすることも難しいだろう。

例えば、*The Edible Woman* では女性登場人物が時々汚い表現を使う。最も女らしい性格として描かれているマリアンの友人クララでさえ、友人との会話ではそういった表現をしている。クララの言葉づかいは、1960年代のカナダ社会で、男性が支配する社会から押し付けられた役割から解放されようともがいていた女性にも、言葉づかいの点ではある程度の自由があったことを示しており、それが読者に含意として伝わっている。しかしながら、その日本語訳では汚い表現が削除され、非常に女らしく洗練された言葉づかいが充てられている。

下に挙げたのは、マリアンが友人のクララに元気かと聞いたときのクララの返答だ。“Shitty”が削除され、その代わりに「のよ」という女性文末詞（オカモトとサトウの分類で *strongly feminine particle*）が付加されることによって、クララの女性性が非常に強調されている。その結果、女性登場人物が汚い表現を使うという含意がここでは失われ、日本語で読む読者には言葉づかいの点では全く違った印象を残していることが分かる。

(7) ST: Shitty, thanks, [...] (Margaret Atwood, 2007 [1969]: 28)

TT: 元気じゃないのよ (大浦暁生, 1996: 35)

スペルベルとウィルソンは、発話の解釈に焦点を当ててこの理論を展開したが、グット(Gutt, 2000)は翻訳という行為も推論的伝達(*inferential communication*)の一部であるという仮定に基づき、関連性理論を翻訳に応用した。グットの推論モデルでは、翻訳において、言語学的に表現された意味と意図された意味ははっきり異なるとしている。このモデルでは翻訳の目的は単に起点テキストの言葉、言語学的構造、特徴を再現するだけではなく、起点テキストに意図された意味をコード読解し、目的読者が共有している文脈条件と推論的関連を導くことだ(*ibid.*: 227)。ということは、単に言葉を別の言語に置き換えるだけでは翻訳とは言えず、翻訳者は言語学的に「何が書かれているか」を訳すだけではなく、「何が意図的に暗示されていると想定されるのか」と「何がさりげなく暗示されているのか」をも訳さなければならない。だから、含意が弱ければ弱いほど、翻訳者がそれを再構築するのは容易ではなくなる。

文脈想定は、読者が著者の意図するものへと接近するための伝達の手がかりを含む(*ibid.*: 134)。この伝達の手がかりは読者に文脈効果をもたらすが、その効果は読者の知識、文化的背景や彼らがいる文脈によって変わる。上に挙げた 2 つの会話が示すように、共有の知識が含意の解釈を確実なものとし、伝達を成功に導く。グットは主に非文学テキストに関して議論したが、この過程は文学テキストを訳す時にさらに重要になる。なぜなら、文学作品には非文学作品よりも含意が含まれるからだ(Boase-Beier, 2006: 40)。翻訳者は「この文が何を意味するか(what does this sentence *mean*?)」と同様に「この文が何をやるか(what does this sentence *do*?)」(Fish, 1980: 25)を推測して、同じ効果を翻訳テキストの中で再構築しなければならない。

日本語で訳されたものを読む場合を、関連性理論の観点から考えてみよう。読者が日本語に訳された文学作品に込められたメッセージを読み解く際に、その意味が伝達される際に使

われる文体がもう1つの情報源となる。先の例文 “it’s a quarter past twelve.” を日本語に訳す場合、上で議論したような日本語の特徴から、その話し手の女らしさや男らしさがその話し方によって加えられることになるだろう。もし、その話し方によって、登場人物のイメージが原書と日本語訳で大きく違ってしまう場合、読者が推論的伝達の意味を解釈するのをじゃますることになる。「意味というのは、常にそれが表現された形によって処理されて伝わる (Meaning always comes to us processed by the form in which it is expressed)」(Fowler, 1977: 22)ことを考えると、また、日本語ではその表現された形の中に登場人物の女性性や男性性が加わることを加味すると、翻訳者が日本語に訳す場合には、「実際に述べられた内容」と「その内容が暗示するもの」を注意深く再構築しなければならないだろう (Boase-Beier, 2006: 40)。

そのテキストに暗示されていることと等価と判断したものを翻訳テキストで再現するのは翻訳者だ。さらに、著者の意図を完全に理解してそれを再構築することはできないという見地に立てば、関連性理論はその翻訳が正しいか、間違っているかを判断する助けになるというようなものではない。それに、同じ翻訳者が同じテキストを数年後に訳した場合、翻訳者が受け取る含意が変わり、その翻訳テキストは違って来るかもしれない。しかし、翻訳という行為は伝達の1つの形式だという関連性理論の主題を意識することは、翻訳の方針を決める上で効果があるだろう (ibid.: 41-42)。

7. おわりに

本稿では *The Edible Woman* の日本語訳で女ことばがどのように使われているのかを、文末詞に重点を置いた定量的・定性的研究手法によって分析した。その結果、*The Edible Woman* の日本語訳は、*Bridget Jones’s Diary* の日本語訳や『キッチン』よりも女性文末詞の使用率が高く、主人公マリアンの話し方はむしろ *Emma* や *Mrs Dalloway* の日本語訳のエマやダロウェイ夫人に近いという結果が出た。受容理論と関連性理論の観点からこの分析結果を考察すると、英語圏の読者が具体化するマリアンのイメージと、日本語で読む読者が具体化するものが違ってくることが分かる。これには2つの理由が考えられる。1つは原書に描かれた社会が押し付ける理想の女像を拒否するマリアンの内面の葛藤にも関わらず、話し方が過剰に女らしく構築されていること。2つ目は、欧米諸国が1960年代から1970年代に経験したフェミニズム運動を、日本は経験してこなかったことだ。日本語訳でのマリアンの言葉づかいは、著者が意図するメッセージを読者が受容する際に障害となりうるし、著者のフェミニストとしてのメッセージが日本語で読む読者に伝わりにくくなるだろう。それゆえ日本語に翻訳する際には、「テキストが何を意味するか」と同時に「その意味するものがどのように伝達されているか」に注意する必要があると考える。

*本稿は University of East Anglia (UK) の School of Literature and Creative Writing (現: School of Literature, Drama and Creative Writing) に提出された PhD Thesis, *De-Feminising Translation: Making Women Visible in Japanese Translation* の Chapter 4: Translation Problems と *Babel* (Vol. 58, no.2) に掲載された論文を基に、大幅な加筆を行なったものです。

.....

【著者紹介】

古川弘子 (Furukawa, Hiroko) 東北学院大学文学部英文学科講師。University of East Anglia より PhD 取得 (文芸翻訳/2011 年)、同大学のポストドクター研究員を経て 2012 年 4 月より現職。*Babel*, *TTR* などへ論文執筆。連絡先: f.hiroko@tscc.tohoku-gakuin.ac.jp

.....

【註】

1. 本稿中の英語文献からの引用は、特に記述がない限り拙訳である。
2. 'If the literary work arises out of the reader's own social and cultural background, it will serve to detach prevailing norms from their functional context, enabling the reader to observe how such social regulations function, and what effect they may have on people subject to them. Readers are thus placed in a position from which they can take a fresh look at the forces which guide and orient them, and which may have hitherto been accepted without question (Iser, 2006: 63)'.

【参考文献】

- Amazon.co.uk Customers' Review. [Online]
http://www.amazon.co.uk/Edible-Woman-Margaret-Atwood/dp/0860681297/ref=sr_1_1?ie=UTF8&s=books&qid=1245142904&sr=1-1 (Oct. 15, 2012)
- Animalnation, *Amazon.com* Customers' Review. [Online]
http://www.amazon.com/Margaret-Atwoods-Edible-Woman-MAXnotes/dp/0878912312/ref=sr_1_1?ie=UTF8&s=books&qid=1245142714&sr=1-1 (Oct. 15, 2012)
- Atwood, M. (2007 [1969]). *The Edible Woman*. London: Virago.
- Austen, J (2005 [1816]), *Emma*. Cambridge and New York: Cambridge University Press.
- Boase-Beier, J. (2006). *Stylistic Approaches to Translation*. Manchester: St. Jerome Publishing.
- Cooke, N. (2004). *Margaret Atwood: A Critical Companion*. London: Greenwood Press.
- de Beaugrande, R. (1978). *Factors in a Theory of Poetic Translating*. Assen: Van Gorcum.
- Díaz-Diocaretz, M. (1985). *Translating Poetic Discourse: Questions on Feminist Strategies in Adrienne Rich*. Amsterdam: Benjamins.
- Fielding, H. (1997). *Bridget Jones's Diary*. London: Picador.
- Fish, S. (1980). *Is There a Text in This Class?: The Authority of Interpretive Communities*. Cambridge, Massachusetts and London: Harvard University Press.
- Fowler, R. (1977). *Linguistics and the Novel*. London: Methuen.
- Furukawa, H. (2009a). Bridget Jones's Femininity Constructed by Language: A comparison between the Japanese Translation of *Bridget Jones's Diary*, and the Japanese Subtitles of the Film. Online Proceedings of the Annual Conference of the Poetics and Linguistics Association

- (PALA). [Online]
<http://www.pala.ac.uk/resources/proceedings/2009/furukawa2009.pdf> (Oct. 15, 2012)
- Furukawa, H. (2009b). 'Fabricated' Feminine Characters: Overemphasised Femininity in the Japanese Translation of *Bridget Jones's Diary* and a Japanese Novel *Kitchen*. *Norwich Papers* 17: 73-89.
- Furukawa, H. (2010). Rendering Female Speech as a Male or Female Translator: Constructed Femininity in the Japanese Translations of *Pride and Prejudice* and *Bridget Jones's Diary*. In Rebecca Parker, et al. (Eds.), *Translation: Theory and Practice in Dialogue* (pp. 181-198). London: Continuum.
- Gutt, E. (2000 [1991], 2nd edition). *Translation and Relevance: Cognition and Context*. Manchester: St. Jerome Publishing.
- Howells, A. (1966). *Margaret Atwood*. Basingstoke: Macmillan.
- Inoue, M. (1994). Gender and Linguistic Modernization: Historicizing Japanese women's Language. In M. Bucholtz, et al. (Eds.), *Cultural Performances: Proceedings of the Third Berkeley Women and Language Conference, April 8-10* (pp. 322-333). Berkeley: Berkeley Women and Language Group.
- Inoue, M. (2003). Speech without a Speaking Body: 'Japanese Women's Language' in Translation. *Language & Communication*, 23: 315-330.
- Inoue, M. (2004). Gender, Language, and Modernity: Toward an Effective History of 'Japanese Women's Language'. In S. Okamoto and J. Shibamoto-Smith (Eds.), *Japanese Language, Gender, and Ideology: Cultural Models and Real People* (pp. 57-75). New York: Oxford University Press.
- Inoue, M. (2006). *Vicarious Language: Gender and Linguistic Modernity in Japan*. Berkeley: University of California Press.
- Iser, W. (1974). *The Implied Reader: Patterns of Communication in Prose Fiction from Bunyan to Beckett*. London: Johns Hopkins University Press.
- Iser, W. (1978). *The Act of Reading: A Theory of Aesthetic Response*. London: Johns Hopkins University Press.
- Iser, W. (2006). *How to Do Theory*. Malden, Mass and Oxford: Blackwell Publishing.
- Keith, J. (1989). *Introducing Margaret Atwood's The Edible Woman: A Reader's Guide*. Toronto and Ontario: ECW Press.
- Lebra, T. (1984). *Japanese Women: Constraint and Fulfillment*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Lecker, R. (1981). Through the Looking Glass: Atwood's First Three Novels. In A. Davidson and C. Davidson (Eds.), *The Art of Margaret Atwood: Essays in Criticism* (pp.177-203). Toronto: Anansi.
- MacKenzie, I. (2002). *Paradigms of Reading: Relevance Theory and Deconstruction*.

- Basingstoke: Palgrave.
- Mazza, C. and J. DeShell. (1995). *Chick Lit: Postfeminist Fiction*. Victoria: Fiction Collective 2.
- Nolte, S. and S. Hastings. (1991). The Meiji State's Policy Toward Women, 1890-1910. In G. Bernstein (Ed.), *Recreating Japanese Women, 1600-1945* (pp. 151-174). Los Angeles: University California Press.
- Okamoto, S. and S. Sato. (1992). Less Feminine Speech among Young Japanese Females. In K. Hall et al. (Eds.), *Locating Power: Proceedings of the Second Berkeley Women and Language Conference, April 4 and 5, Vol.1* (pp. 478-488). Berkeley and Calif: Berkeley Women and Language Group.
- Okamoto, S. (1995). 'Tasteless' Japanese: Less 'Feminine' Speech among Young Japanese Women. In K. Hall and M. Bucholtz (Eds.), *Gender Articulated: Language and the Socially Constructed Self* (pp. 297-325). New York and London: Routledge.
- Pilkington, A. (2000). *Poetic Effects: A Relevance Theory Perspective*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Sperber D. and D. Wilson. (1986). *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford: Blackwell.
- Sperber D. and D. Wilson. (1995, 2nd edition). *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford: Blackwell.
- Stein, K. (1999). *Margaret Atwood Revisited*. New York: Twayne.
- Woolf, V. (1996 [1925]). *Mrs Dalloway*. London: Penguin Books.
- Yhamee, *Amazon.co.jp* Customers' Review. [Online]
<http://www.amazon.co.jp/review/product/4105225022/> (Oct. 15, 2012)

- マーガレット・アトウッド (大浦暁生訳) (1996)『食べられる女』新潮社
- ジェーン・オースティン (ハーディング祥子訳) (1997)『エマ』青山出版社
- ヘレン・フィールディング (亀井よし子訳) (2001 [1998])『ブリジット・ジョーンズの日記』ソニー・マガジンズ
- 小林千草 (2007)『女ことばはどこへ消えたか?』光文社
- 中村桃子 (2007)『〈性〉と日本語—ことばがつくる女と男』NHK 出版
- ヴァージニア・ウルフ (近藤いね子訳) (1999 [1976])『ダロウェイ夫人』みすず書房
- ヴァージニア・ウルフ (丹治愛訳) (1998)『ダロウェイ夫人』集英社
- ヴァージニア・ウルフ (富田彬訳) (2003 [1955])『ダロウェイ夫人』角川書店
- 吉本ばなな (2006 [1988])『キッチン』角川書店

